



明治学院歴史資料館

News Letter

No.17

2025

目次：	巻頭言
1	／ 長谷川一（歴史資料館館長、文学部芸術学科教授）
2	法学部ゼミで明治学院の歴史を学ぶ ／ 蛭原健介（法学部グローバル法学科教授）
3	キャンパス内で歴史の息遣いに触れる －歴史的建造物見学会実施の意義－ ／ 辻直人（教養教育センター非常勤講師・協力研究員）
4-5	賀川豊彦文庫の歩み——明治学院から松沢資料館へ ／ 藤原直美（特任研究員）
6	2025年度 企画展開催報告 ／ 眞島めぐみ（特任研究員）
7	歴史資料館展示室のリニューアルオープン ／ 北綾子（学芸員）
8	明治学院歴史資料館 2025年度主な活動、その他

巻頭言

収藏品たちの二つの居場所

長谷川 一（歴史資料館館長、文学部芸術学科教授）

収藏品はミュージアムの主役であり宝です。その収藏品たちには二つの居場所があります。展示室と収蔵庫です。

収藏品にとって展示室は、いわばハレの舞台です。展示とは、収藏品を来館者に見ていただくための場のこと。とりわけ当館では、研究教育機関の立場から、可能なかぎり収藏品の「現物」（原物、実物）を展示する方針をとっています。展示室は、この世にただひとつしか存在しない現物に来館者が直接出逢うことのできる場所なのです。

現物展示なんてあたり前じゃないか。そう思われる方もいらっしゃるでしょう。たしかに美術品などのばあいはそうかもしれない。けれども歴史的資料の現物展示はかならずしも自明ではありません。展示は劣化の進行とトレードオフだからです。むしろ近年では、現物の代わりにレプリカ（複製）を展示する例が多く見られます。

それでも当館が現物展示にこだわるのは、現物だけがもつ重みを来館者と分かちあいたいからにほかなりません。この現物だけがもつ重みのことを、わたしの専門とするメディア論では「アウラ」とよびます。アウラの源は、歴史的に連綿と存在してきた物質が眼前にあって見る者と時間・空間を共有しているという〈いま—ここ〉的な一回性にあります。どれだけ精巧につくられたレプリカでも、アウラだけは受け継ぐことができないのです。

展示物だけではありません。当館のばあい展示空間もまた「現物」です。展示室のある記念館自体が歴史的記念建造物であるからです。同時にこの事実にはべつの側面も付随します。すなわち乏しい気密性が温湿度管理をむずかしくし、展示物の劣化を不可避に加速させてしまうのです。長らくスタッフの頭痛の種でもあったこの問題については、さいわい学院のご理解を得て今年度、展示室の改修を

実施いたしました。詳しくは本ニューズレター所収の北綾子学芸員の報告をご参照ください（p. 7）。

ただし今回の改修は、あくまで対症療法的なものでありません。貴重な収藏品を安心して展示できる環境を用意するためには、設計段階から十分な配慮を盛り込んだ専用の展示室の設置が不可欠です。

いっぽう、収藏品たちにとって展示室がハレの場だとすれば、収蔵庫はケの場所といえるでしょう。収蔵庫とは、収藏品を適正な管理のもと永続的に保管する設備のこと。ところが当館における収蔵庫の現実、展示室以上に厳しいものがあります。残念ながら本学には現状、収蔵庫とよぶに足る設備が存在せず、白金校地本館地下にあるBM倉庫を他部署と共有しつつ、なんとかしのいでいるというのが実状です。あいにくBM倉庫は、そもそもの設置目的が異なることもあり、ミュージアム収蔵庫として最低限の要件さえ満すものではありません。先年も害虫の発生が確認され、駆除を余儀なくされました。

当館の運営体制はこの十年ほどでじょじょに整ってまいりましたが、依然として致命的な未解決課題をかかえています。貴重な収藏品たちにとって適切な居場所をいかに確保するかという課題です。

当館の使命は、明治学院の歴史的資料を蓄積・管理するとともに、その価値をひろく学内外と共有してゆく要となることにあります。収藏品は、学院の過去と現在を結びつけ、未来を切り拓いてゆくためのメディアなのです。そしてわたしたち現在の学院構成員には、先人から受け継いだこれら収藏品を、よりよい状態で次代へ伝えてゆく責務があります。現代的な水準で運用可能な専用の展示室と収蔵庫を一日も早く新設していただければと願うしだいです。

法学部ゼミで明治学院の歴史を学ぶ

蛭原 健介（法学部グローバル法学科教授）

明治学院大学に着任して早 25 年になりますが、これまで本学院の歴史については、まとまって勉強する機会をもつことができず、それゆえ学生たちにも十分に教えることができませんでした。せいぜい憲法の授業で、「文部省訓令第 12 号」の話に言及するくらいでした。

本学院の歴史を学ぶ機会を学生に積極的に提供したいと思い始めたのは、COVID-19 のパンデミックの頃でした。2021 年に対面での授業が可能になると、まずは法学部の 1 年生たちと、大学公式サイトに掲載されている「へボンの足跡を訪ねて～港町コース」を歩き、横浜指路教会、横浜開港資料館、横浜海岸教会などを見学しました。大部分がオンラインの授業ばかりだった時代において、貴重なリアルな学習となりました。そして、今回、かつて社会連携課でお世話になっていた山田真嗣さんが歴史資料館に異動されたということで、ゼミ活動の一環として、本学院の歴史的建造物について学ぶ特別ゼミを開催できないかをご相談させていただいたところ、ご快諾いただき、2025 年 5 月に実施することができました。

明治学院系列校出身の学生を除けば、大半の学生は本学院の詳しい歴史を知らないまま卒業していきます。何か知っていることは無いかと聞いても、へボン博士と「Do for Others」くらいしか出てこないものです。そこで、事前学習として、歴史資料館の web ページに掲載されている「学院の古き建物たち」のいくつかの項目を読んでおくよう指示したうえで、当日は、山田さんの詳しい解説を聴きながら、1 時間半をかけて、チャペル、記念館、インブリー館の順で歴史的建造物 3 棟を見学しました。とくに学生たちの印象に残ったのは、通常は立ち入ることのできないインブリー館であったように思います。私も屋根裏まで上がって火災の跡を見たのははじ

めてであり、大変衝撃を受けました。インブリー館 2 階会議室に座らせていただきながら、「私雇外国人居留地外僑寓証票」に触れさせていただいたのも、貴重な経験となったようです。

ゼミ生たちは、「今回の見学を通して、明治学院大学創設までの歴史だけでなく、教育愛の溢れた様々な方に支えられて今の明治学院大学が存在していることを認識できた。明治学院大学の歴史と在学生であることを誇りに思っ学びを深めつつ、今回学んだ経験や明治学院大学の魅力を広めていきたい。」「明治学院大学は、多くの人の尽力によって受け継がれ、支えられてきたのだと痛感した。明治学院の歴史を学び、明学生で良かったと誇りを強く持てるようになった」といった感想を寄せています。私も同様に、本学院の歴史や建造物の価値、多くの先人の偉業については、ゼミ生だけでなく、本学に在籍するすべての学生や教職員にも広く知っていただきたいと思っております。

ところで、本学院におけるへボン博士同様、北海道大学といえばクラーク博士がシンボリックな存在であり、「Boys, be ambitious」という言葉はあまりにも有名です。しかし、彼は、本務校のマサチューセッツ農科大学から 1 年間のサバティカルを取得して来日して札幌農学校の教頭になりましたが、札幌滞在は 9 か月だけでした（1876 年～1877 年）。他方で、へボン博士は、1859 年に来日し、1892 年まで滞在しています。にもかかわらず、北海道大学とクラーク博士ほどの知名度があるかといえば、かならずしもそうではないようです。33 年にわたるへボン博士の本学院や日本への貢献を、まずは学生たちに、そして彼らを通じて、国内外の多くの方に知っていただきたいと願っています。



授業の様子



インブリー館屋根裏の見学

キャンパス内で歴史の息遣いに触れる－歴史的建造物見学会実施の意義－

辻 直人（教養教育センター非常勤講師・協力研究員）

明治学院が築地から白金の地に移ってきたのが1887年であるから、既に白金で138年もの時間が経過している。キャンパスは海軍墓地の購入により拡張したり、一方で国道の拡幅で削られたり、更に建物も幾度と起きた火災による消失や老朽化等による建て替えによって大きく変化してきた。

そうした時代の流れをくぐり抜けて様変わりしたキャンパスで、3つの建物は「歴史的建造物」として現在も大事に残され、使用されている。インブリー館（1889年頃建設）と記念館（旧神学部校舎兼図書館、1890年建設）はほぼ白金校地開校以来の歴史があり、礼拝堂（1916年建設）も建造以来100年の時を刻んだ。まさに白金キャンパスの歴史を後世に伝える「生き証人」のような存在だ。

私は2018年度より「明治学院研究2」を、2024年度からは「明治学院研究3」も担当することとなり、春学期には宣教師の活動について紹介した「2」を、秋学期には明治学院史を日本キリスト教史や日本教育史の文脈に位置付けながら紹介する「3」をそれぞれ開講している。受け持ち始めた当初は20名くらいだった受講生が、2025年度は特に多く、春学期は90名強、秋学期も60名ほどの学生が受講登録をしてくれた。受講しようとした理由を尋ねてみると、「先輩からこの授業について聞いた」とか「卒業までに明治学院の歴史について学んでおきたかった」というように答えてくれる学生が少なからずいた。興味を持ってもらえるのはありがたい限り、と受け取めている。

明治学院の歩んだ道は一私学の話にとどまらず、広く日本のキリスト教学校や教会の動向、社会動静や教育行政の動きにも強く関わっている。明治学院の歴史を学ぶことは、日本近代史を明学の視点で読み解くことでもある。母校が時代の流れにどのように対応してきたのか、その時代の教師や学生たちに思いを寄せながら歴史を深く理解してほしいと願い、授業を提供している。せっかく明治学院の歴史を学ぶのに、教室内にとどまって考えるだけではもったいない。歴史の現場であり「生き証人」である歴史的建造物に直接触れて、歴史の流れを感じ取ってほしい、当時の人たちの存在を五感で感じてほしいと考え、歴史資料館のご協力のもと、大体授業の11回目前後に歴史的建造物見学会を開催している。

学生たちは、普段何気なく前を通ることはあっても、歴史的建造物の中に入ったことはない。特に近年の学生はコロナの影響で礼拝堂にも入る機会がなかったようだ。ましてや、インブリー館や記念館に入ったことのある学生はまずいない。毎回の見学会では3、4班に分かれて歴史資料館の学芸員さんと職員さんに引率していただき、それぞれの建物内を案内していただく。インブリー館の壁の色がなぜ黄色いのかといった内装についての質問や説明などを通して、実際に宣教師インブリーがここに住んでいたことを感じてもらう。

あるいは、礼拝堂南東に今も残る御真影保管場所だった奉安所の鉄扉と梯子については私も授業中に説明をするが、実際に外側だけでなく、その内部がどうなっているのか特別に礼拝堂の中にも入れていただき確認する。ホキエ学院長事務取扱が苦慮して文部省から受け取った御真影を、急遽の改良で設けた礼拝堂一角の奉安所。当時の様子を伝える写真に、教職員と学生たちが、今も残る銀杏並木に整列して恭しくホキエら文部省から帰ってきた車を迎え入れている場面を写した一枚がある。同じ場所に立って時代の追体験をする。キャンパス内で直接歴史を感じられる場所があることは、なんと恵まれたことか。

見学会は様々なアプローチが可能だ。パイプオルガンなど西洋音楽や楽器の受容の観点から校内を見学することもできよう。明治期の建築について肌に触れて学ぶこともできる。街の区画といった行政的視点からも見ることができよう。歴史の息遣いを感じられる機会を、多くの学生に経験して欲しいと願う。彼らもこのキャンパスの歴史の一部なのだから。



授業の様子

賀川豊彦文庫の歩み——明治学院から松沢資料館へ

藤原 直美（特任研究員）

明治学院大学図書館が所蔵する「賀川豊彦文庫」は、現在、世田谷区にある賀川豊彦記念松沢資料館に寄託されている。本稿では、学生時代に培われた賀川の”原点”と、彼の思想を支えた蔵書について述べたい。

賀川豊彦（1888－1960）は、日本を代表する社会活動家であるが、1905年から07年にかけて明治学院高等学部神学予科で学んだ。17歳から18歳という多感な時期を白金の丘で過ごし、様々なエピソードを生んだ。例えば、当時、明治学院図書館は神学から自然科学にいたるまで国内外の蔵書を数多く集めた日本屈指の学びの場だったが、賀川はこの図書館に通いつめ、「本バカ」とあだ名されるほど読書に没頭したという。友人たちは「賀川は図書館の本をほとんど全部読んでしまった」「食事中も風呂でも本を手放さない」と語っており、その知的好奇心と探究心の強さがうかがえる。一方、そうした態度を快く思わない学生たちからはよく生意気だといって殴られたと、賀川は振り返っている。その頃の明治学院は、賀川によれば「不良少年もおれば、かっぱらいを専門にする者もいるような始末」であったという。

またある時は、賀川が主張した非戦論をめぐって口論になり、賀川は上級生から鉄拳制裁を受けた。とはいえ、殴られたとしても自身の考えを曲げないのが賀川の性分で、一回生の夏休みに徳島に帰省した折に、帝国主義に異議を唱える論考を「徳島毎日新聞」に数回にわたり寄稿した。この論考は後に「世界平和論」としてまとめられ、『賀川豊彦全集』に所収された。全集の編纂に携わった武藤富男は、「この小論文は賀川研究における最も大切な著作の一つである」と評する。なぜなら「この内容が『三つ児の魂、百までも』の諺の通り、後年賀川が発表した経済論、平和論その他の論文に盛られた思想の萌芽をなしているからである」と。

賀川は、生涯を貫く平和思想の”原点”を明治学院の学生時代に見出したといえよう。賀川の代表作『死線を越えて』の冒頭に描かれた白金の風景も、まさにこのような、学び、語り、議論し、友情を分かち合った青春の日々を映し出している。

賀川は終生、読書家であり続け、没後には膨大な蔵書を残した。これらは夫人・ハル氏と長男・純基氏の「賀川は母校明治学院の図書館に一番お世話になったから、明治学院に収めるのが最もふさわしい」との厚意により、明治学院大学図書館に寄贈された。同図書館ではすぐに「賀川豊彦文庫」として整備し、『賀川豊彦文庫（仮目録）』を刊行した。扉には賀川の肖像写真と、彼自身の絵をもとにした蔵書票（Ex Libris）が添えられている。

1982年9月、「賀川豊彦文庫」1万1千点の資料が賀川豊彦記念松沢資料館に移管・搬入され、寄託された。現在は同資料館地下にある温湿度管理された収蔵庫に収められている。その入口には「明治学院大学附属図書館 賀川豊彦文庫」という看板が掲げられ、蔵書の一冊一冊には賀川の蔵書票が貼られている。

松沢資料館はミュージアム・アーカイブズ・ライブラリーの三部門から成り、ミュージアムでは賀川の生涯や社会事業の軌跡を紹介している。1931年に建立された旧松澤教会が館内に移築され、当時の礼拝空間を体験できるのも特徴である。アーカイブズには手稿や書画などの原資料が、ライブラリーには賀川文庫の蔵書のほか、関係者から寄せられた国内外の書籍、賀川研究に関する刊行物が収蔵されている。アーカイブズとライブラリーは一般公開されていないが、研究目的であれば事前予約により閲覧が可能である。



賀川豊彦記念松沢資料館、筆者撮影

志を立てた白金の丘、夢を託した松沢の書棚

2025年夏、筆者は学芸員資格取得のための博物館実習を松沢資料館で経験した。原稿の脱酸処理や絵画資料のクリーニング、動物剥製や岩石標本のメンテナンス、書簡のデータ整理など、多岐にわたる実習を通して、賀川の活動の広さと、そこに一貫して流れるキリスト教精神に触れることができた。世界規模の構想を描きながら、同時に身近な一人一人に寄り添う優しさを持つ賀川の姿勢に、理想と実践がひとつに結びついた信仰の力を感じた。蔵書を手にとると、賀川は一体どんな気持ちで読んだのだろうと自然と思いを馳せるようになる。各地で収集した子ども向け資料からは、子どもたちに世界の不思議さや面白さを伝えようとした温かな眼差しが伝わってくる。頼まれれば惜しみなく筆をとった書画の数々には、「一步でも進めるために、何でもやろう。してあげられることなら何でもしてあげたい」という賀川の実践的精神が滲んでいる――。

原資料に触れることで感じられることは多いが、それは博物館の使命とも通じることだろう。若き日の志を立てた白金の丘から、晩年を過ごした松沢の地へ、賀川が愛してやまなかった本たちは受け継がれ、明治学院と松沢資料館を結ぶ見えない絆の証として、今も静かに語りかけている。

生前、賀川は「私の最も好きな学校は明治学院です」と語っていたという。賀川が創設に関わった社会学部の二十周年記念誌で当時の学長・森井眞は、「賀川豊彦の名を我々がしばしば挙げるのは、賀川が有名だからではない。賀川こそ明治学院の理念をみごとに生きた先輩の一人だからである」と述べた。賀川が明治学院に残したスピリットこそが、未来に引き継いでいくべき遺産といえよう。

2026年秋より、明治学院歴史資料館では賀川豊彦企画展の開催を計画している。松沢資料館をはじめ各機関と連携しながら、賀川の”原点”を描くことができたらと考えている。



館内の「明治学院大学附属図書館 賀川豊彦文庫」、筆者撮影



賀川の絵を元にした蔵書票、筆者撮影

〈参考文献〉

- 賀川豊彦「腹這ひして見た蜃気楼」、鷺山第三郎『明治学院五十年史』明治学院、1927年。
- 鳥飼慶陽『賀川豊彦と明治学院 関西学院 同志社』文芸社、2017年。
- 林啓介『賀川豊彦：時代を超えた思想家（阿波の偉人伝）』阿波銀行、2000年。
- 武藤富男「解説」、賀川豊彦全集刊行会編『賀川豊彦全集』第10巻、キリスト新聞社、1964年。
- 森井眞「社会学部設立二十周年を祝して」、『社会学部20年の歩み：記念樹とともに』明治学院大学社会学部設立20周年記念事業委員会、1986年。

2025年度 企画展開催報告

眞島 めぐみ (特任研究員)

戻ってきた、明治学院日本はじめて物語

——佐々木邦と安藤博

◆会期 2025年4月24日(木)～8月22日(金)

過去に歴史資料館において開催した展示を受け継ぎ、かつ再検討を加えたうえで新たな形で再展示することを試みました。今回は2019年から2021年にかけての企画展示「明治学院 日本はじめて物語」(第4集)を取り上げ、当時作成されたパネルを再び掲示し、学院ならではの「日本はじめて」の事柄やそれを成し遂げた人物たちの功績、努力の跡に改めて光をあてました。そして展示ケースでは、パネルに登場する人物のうち、日本最初のユーモア作家とされる佐々木邦(1883-1964)と、「多極真空管」の発明によって放送界に貢献した安藤博(1902-1975)に焦点をおきました。前回の展示では出陳が叶わなかった資料や新収資料を並べ、彼等の生み出した「小説」「発明」の面白さや学院での生活の様子、後輩に残した言葉などを紹介しました。過去の展示を訪れた方も、初めての方にも、少しだけ姿を変えて「戻ってきた」展示をお楽しみいただけたのではないかと存じます。

また同期間中に、ちいさなてんじ「曳家 残されたインブリー館と記念館」を併催。白金キャンパス開校当初から今も残る2棟が、数々の危機をどのように乗り越えてきたのか。「曳家(ひきや)」を鍵語として、その波瀾の歴史を紹介しました。



沖野岩三郎が伝えた資料たち展 展示資料



佐々木邦と安藤博展 展示風景

【開催中】書いて、書いて、また書いて

—沖野岩三郎が伝えた資料たち

◆会期 第一期：2025年9月1日(月)～11月3日(月)

第二期：2025年11月11日(火)～12月22日(月)

第三期：2026年2月16日(月)～4月28日(火)

沖野岩三郎(1876-1956)は、明治学院神学部の卒業生で、牧師、作家として知られる人物です。2026年1月に生誕150年を迎えるにあたり、沖野岩三郎という人物、並びに当館が所蔵する沖野関係の資料について、より多くの方々に知っていただく機会とすべく企画しました。出陳資料の多くは1952(昭和27)年に沖野本人が明治学院に寄贈した原稿類です。独特の筆跡や原稿用紙の使い方といった直筆資料ならではの魅力が際立つよう構成しました。原稿を埋め尽くす文字からは、自らを「文筆労働者」と呼び、日々ひたむきに筆をとり続け、幅広く膨大な著作を残した沖野の力強い生きざまが伝わったのではないのでしょうか。なお、本展示は年度をまたいで現在第三期を開催中。来館記念の“お土産”として当館スタッフ手作りの葉もご用意していますので、ぜひご来場の上、ご鑑賞の思い出にお持ち帰りいただければ幸いです。



沖野岩三郎が伝えた資料たち展 来館者配布用しおり

また第一、二期には、ちいさなてんじ「絵はがきと明治学院 歴史を伝えるちいさな便り」を併催し、創立周年記念はがきやクリスマスカードといった様々な絵はがきを展示し、明治学院の歩みを辿りました。

来場者数は4月24日から12月22日までで5,710名。はじめて知ることばかりだった、先輩たちの苦勞を知ることができた、こうした同窓生をもっと取り上げてほしい、など、貴重なご意見や励ましの声もいただきました。ご来場いただき、誠にありがとうございました。

歴史資料館展示室のリニューアルオープン

北 綾子（学芸員）

この度、歴史資料館は12年ぶりに展示室の改修工事を行い、2月16日にリニューアルオープンしました。今回リニューアルした内容について概要をご紹介します。

展示室

当館の展示室は、リニューアル前まで、企画展示と常設展示のエリア分けが明確ではありませんでした。展示導線の分かりにくさを解消するために、展示室の中心で分けを行い、入館したときに手前となる空間が常設展示、奥を企画展示としました。これにより、各展示の導線がはっきりとし、鑑賞しやすくなりました。また、企画展示替えのたびに展示室全体を一定期間閉室としなければなりませんでした。手前の常設展示のみを開室できるようになったため、展示替えに伴う閉室日数を削減し、開室日を増やすことができました。

常設展示

明治学院の創設から現在までの変遷をたどるキャンパスジオラマを時系列に並べ、常設展示のメインに据えました。ジオラマと対応した各時代の説明パネルを配置することにより、学院史の流れを一目で分かるようにしました。また、創設者のJ.C.ヘボン、S.R.ブラウンなどに焦点をあてて、『和英語林集成』の成立と、聖書の翻訳を中心に解説することになりました。これにより、明治学院創設の流れと、創設者の社会的貢献について体系的に知ることができます。他には、画家・長尾己（ながお・き）が描いた、創設者や歴代学院長の肖像画もみどころの一つです。肖像画を一定期間ごとに入れ替えて順次展示することで、学院を築いてきた人々について一人一人掘り下げて紹介していきます。

展示室内の環境改善

歴史資料館展示室は明治学院記念館の一部を展示スペースとして利用していますが、明治学院記念館は港区の指定有形文化財（建造物）であるため、建物を傷める可能性がある工事は行えません。しかしながら、展示室は展示資料や来館者の方にとって快適な環境であることが求められるため、文化財である建物に対して十分に配慮したうえで、展示室内の改修を進めました。展示室内の空調機を新調し、窓に遮熱性や気密性を上げる細工を施すことで、展示室全体の温湿度が管理しやすくなりました。展示ケースに関しても、これまで使用されてきたものは展示ケースのガラス面に隙間があり、気密性が乏しかったため、害虫やカビが侵入する恐れがあり、ケース内の温湿度が外気の影響を受けやすいという問題がありました。これを解消するために、既存の展示ケースの隙間を塞ぎ、気密性を高める改修を行いました。また、新造の準エアタイト展示ケースを導入することにより、防虫・防カビはもちろんのこと、展示ケース内を資料にとって適切な温湿度で管理できるようになりました。

生まれ変わった明治学院歴史資料館展示室の姿を是非ご覧頂けますと幸いです。みなさまのご来館を心よりお待ちしております。



常設展示



企画展示



常設コーナー展示

明治学院歴史資料館 2025年度主な活動

開催中企画展示

「書いて、書いて、また書いて
沖野岩三郎が伝えた資料たち」
2025年9月1日(月)～
2026年4月28日(火)
2026年3月現在、第三期開催中。

次回開催予定企画展示

「もう一人の明治学院創立者クララ・ヘボン」
2026年5月14日(木)～2026年11月3日(火)
明治学院の淵源となるヘボン塾を始めたクララ・ヘボン。本展では、これまで十分に知られてこなかった彼女に光を当てます。人を育て、学びの礎を築いたクララは、明治学院創設者の一人と呼ぶにふさわしい存在。その静かで確かな足跡をたどります。

沖野岩三郎手稿コレクション

歴史資料館のデジタルアーカイブズ上で、当館が所蔵する沖野岩三郎直筆の原稿や書簡、短冊等を「沖野岩三郎手稿コレクション」として登録し、書誌情報とカラー画像を公開する運びとなりました。どなたでも自由にご覧いただけますので、ぜひご活用ください。

教育支援等

- 5月8日(木)ゼミ見学(飯田浩司先生) 歴史的建造物3棟見学、所蔵資料「白金學報」
- 5月29日(木)ゼミ見学(蛭原健介先生) 歴史資料館展示室、歴史的建造物3棟見学、所蔵資料「私雇外国人居留地外僑寓証票」
- 6月17日(火)教職専門演習(石井久雄先生) 歴史的建造物3棟見学、所蔵資料屋我良明氏寄贈「日本留学生証明書」等
- 6月26日(木)明治学院研究2(辻直人先生) 宣教師資料紹介、歴史資料館展示室、歴史的建造物3棟見学
- 6月30日(月)プレ学内シンポジウム「『記念館』って何を記念しているの？」(山田真嗣)
- 12月4日(木)明治学院研究3(辻直人先生) 歴史資料館展示室、歴史的建造物3棟、御真影奉安所跡見学
- 12月8日(月)、15日(月)視聴覚教育メディア論B(三河内彰子先生)

明治学院史と歴史的建造物3棟の概要説明、歴史的建造物3棟、歴史資料館展示室見学

- 12月9日(火)、16日(火)教職専門演習(石井久雄先生) 歴史資料館展示室、記念館、小チャペル、インブリー館見学

資料の受贈

高野綱氏 山崎賞銀時計 1点
乃村利恵子氏 井深ホール写真 他9点

細井守氏 北村季晴関連資料 7点
都留和夫氏 都留仙次ガラス乾板写真 1点

購入資料

曼子寫「賀川豊彦人道之圖幅 賀川豊彦演説之圖」

明治学院歴史資料館刊行物のお知らせ

『明治学院歴史資料館資料集』第22集 「井深梶之助とラヂオ ―書きとめられた声の記録―」

2026年3月刊行

今からおよそ100年前、明治学院第二代総理を務めた井深梶之助(1854-1940)は、ラジオ放送開始間もない時期に講師としてラジオ講話を行い、また自宅に設置したラジオセットで様々な声に耳を傾けました。本書は、歴史資料館が所蔵する自筆原稿や日記といった資料から、井深が人々に届けた声、井深が聴いた声の記録を辿るものです。さらに、井深花、佐々木邦、安藤博ら明治学院ゆかりの人々とラジオとの縁を感じられる資料も収録しています。ぜひご一読ください。

2025年度 明治学院歴史資料館委員

- 委員長 長谷川一 (文学部 明治学院歴史資料館長、歴史資料館委員会委員長)
- 委員 助川哲也 (国際学部 図書館長)
- 浅羽麗 (文学部)
- 宮崎理 (社会学部)
- 植木献 (教養教育センター)
- 櫛田健一 (法人事務局長)
- 鈴木直子 (図書館職員)
- 吉本絢香 (明治学院高等学校教諭)
- 青野由美 (明治学院中学校・東村山高等学校教諭)

歴史資料館

館長 長谷川一
特任研究員 眞島めぐみ 藤原直美
協力研究員 辻直人 木村一 小暮修也 松本智子
学芸員 北綾子
事務局 古澤勝 山田真嗣 三上耕一

明治学院歴史資料館 News Letter No.17
発行者 明治学院歴史資料館
発行日 2026年3月31日
〒108-8636 東京都港区白金台1-2-37
電話：03-5421-5170
E-mail : shiryokan@mguad.meijigakuin.ac.jp
WEB : https://shiryokan.meijigakuin.jp